

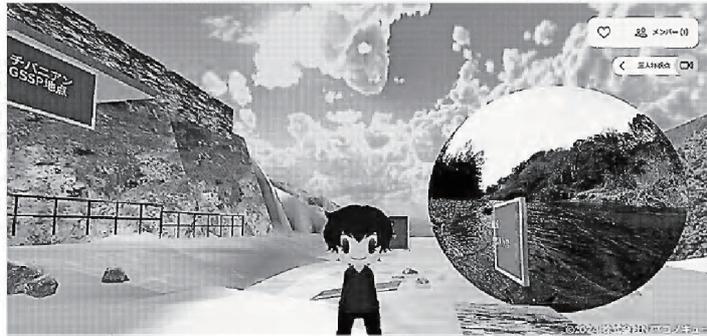
仮想空間にチバニアン

市原市は産官学で連携し、地質学上の一時代となった「チバニアン（千葉の時代）」の基準地である同市田淵の地層を、インターネット上の仮想空間「メタバース」で見学できるサービス始めた。市のホームページから無料で楽しめ、自身のアバター（分身）を操作して現地の地層や化石を見られる。

（平田健人）

産官学連携

市原市HPで公開



地層や化石 スポット再現

市原市が始めたメタバースでチバニアンを見学できるサービス。手前のアバターを操作し、現地の地層や化石などの画像を楽しめる。

同市と千葉商科大学、NTT東日本が17日、共同で実証実験を始め、メタバースを公開した。メタバースを作成できるNTTグループのサービス「DOOR」を活用し、千葉商科大の鎌田光宣教授と学生がチバニアンの見学スポットを再現した。市はメタバースの評価や利用実態などの検証を行う。

チバニアンは約77万4000〜約12万9000年前の時代で、2020年1月に命名が決まった。市原市田淵の地層には、約77万3000年前に地球の磁気（地磁気）が反転した痕跡が残り、それ以前との境界を最もよく示す「国際標準模式地（GSSP）」に選

ばれている。チバニアンのメタバースには、現地の地層や化石などに関する写真や解説資料といった仕掛けを用意した。利用者はアバターでその地点まで移動し、クリックすると画像などを楽しめる。市は今後、多人数が同時にオンラインで会話できるメタバースの特長を生かし、チバニアンをテーマにしたイベントも開く予定だ。

市は今回の取り組みを、チバニアンの魅力発信にとどまらず、メタバースを行政に活用するための検証と位置づける。将来的には、メタバース上に行政サービスの窓口を開設することも検討している。

小出譲治市長は17日の記者会見で「（メタバースが）どれだけ便利かを知るきっかけになり、行政サービスに展開した時に、（市民が）迷わず利用できるようになればいい」と期待を示した。